

心の「根っこ」を育てる ～あたりまえを上等に、安心を土台に～

学校法人みその幼稚園 園長 細谷 實

幼児期は、学力テストなどの数値では測れない「人間力」や「生きる力」である「非認知能力(EQ)」を育む大切な時期です。これからの教育改革の鍵とも言われるこの「根っ子の教育」において、日々の生活で意識したいポイントをご紹介します。

1. 「あたりまえのこと」を上等に積み重ねる

私は子どもたちに、「誰でも出来ることを上手にやりましょう」と伝えています。その代表が「挨拶」です。特に大切にしているのは、「挨拶は目と目」を合わせることです。

挨拶はIQや学歴に関係なく、やる気さえあれば誰にでもできることです。しかし、この「あたりまえのこと」を心を込めて上等にできる人は、現代社会においては高い評価を得ることができます。身近で、挨拶の仕方を改善したことで周囲の信頼を得て、管理職へと昇進した人の事例もあります。「簡単なことがしっかり出来ない人は難しいことなんか出来ない」という言葉の通り、幼児期にあたりまえの簡単なことを上等にして、それらを身に付けることが人格形成の基礎(根っ子)になります。

2. 「心の基地」とアタッチメント

子どもにとって、家庭は最も重要な「心の基地」です。この基地には2つの役割があります。

- 避難所としての役割：子どもが不安や恐怖を感じた時に、「痛かったね」「怖かったね」と共感的に受け止めることです。言葉と表情で心底慰められることで、子どもは「自分は守られている」という真の安心感を得て、感情を立て直す力を養います。

- 応援・見守りとしての役割：安心感を得て元気になった子の背中を押し、新たな挑戦へと送り出してあげる、そして見守ることが大切な役割です。

これらの土台となるのが、特定の大人(親)にくっついて安心感に浸る「アタッチメント(愛着)」です。

我が子が感情を崩した時にしっかりと寄り添い「心の基地」となっているでしょうか？

3. 子どもは大人の「後ろ姿」を見ている

子どもたちは、大人のあらゆる行動を驚くほどよく観察しています。メジャーリーガーの大谷翔平選手が球場でゴミを拾う姿が称賛されるように、「誰にでもできる良きことを上等にする」姿を私たち大人が見せられているのでしょうか。

挨拶ひとつにしても、大人が心を込めた「上等な挨拶」を実践していれば、子どもはそれを自然に学び取ります。今こそ、私たち大人が子どもたちの良き手本となれるよう、どのような「後ろ姿」を見せるべきかを意識することが重要です。

子育ては「急がば回れの大きな心で」

物事には順番があります。そして子育ては、大きな樹木を育てることに似ています。目に見える枝葉（目先の学力）を伸ばすことに急ぐのではなく、まずは土の下にある「根っこ（非認知能力）」をしっかり張らせ、どんな風が吹いても倒れない「安心という土壌（心の基地）」を整えてあげてください。その確かな根っこがあれば、子どもたちは将来、自立して自分自身の力で豊かな花を咲かせることができるはずです。